

# グローバル

第13号

研究報告



フェリス女学院大学大学院国際交流研究科

# 目 次

フェ・イ・アレグリアによるボリビアへの教育支援についての考察  
—サンタ・クルスの寄宿制女子職業学校を事例として—

加 藤 郁 子 …… 1

# フェ・イ・アレグリアによるボリビアへの教育支援についての考察

## — サンタ・クルスの寄宿制女子職業学校を事例として —

加藤 郁子  
指導教員 寺尾隆吉

貧困には、経済的側面に加え、社会的・政治的な側面もあると、国連開発計画（UNDP）は、指摘している。一人一人が自らの才能と能力を十分に伸ばし、それを政治や経済、社会のさまざまな活動で発揮できるようになることや、人生の選択肢が増えた中で自らの意思に基づいて決定することで、尊厳をもって人生を生きることが可能となる、という「貧困」をとらえる新たな概念によって、教育面も重視されるようになった。

ボリビアの教育史を見ると、独立後でさえ先住民への教育は長い間に亘り蔑ろにされてきた事実が浮かび上がる。教育の欠如から非識字率が高かった先住民の家庭では、日常生活に精一杯であり、子どもたちは重要な働き手でもあったことと、貧困農村部には学校も不足していたため、就学率は極めて低かった。

このような正規教育システムから排除されてきた人々に対し、1960年頃から宗教団体を中心とした民間団体が教育支援を始めている。国民の大多数（95%以上）がカトリックであるため、これらのほとんどをカトリックの宗教団体が占めてきた。そして、後には、こうした宗教団体のいくつかは、NGOに変わっている。

現在、ボリビアの学校は大まかに、「公立学校」、「私立学校」、「政府と協定を結んでNGOが教育サービスを提供する学校」の三つに分けられる。「政府と協定を結んで宗教団体が教育サービスを提供する学校」として、1955年にイエズス会によってベネズエラで創設されたフェ・イ・アレグリアをボリビア政府が1966年に招き入れた。その目的は、「貧しい人びとと優先」で、経済的・社会的理由から教育の機会がない子どもたちへ貧困を乗り越えるための教育を支援することで、そのために、政府が建物と備品等を用意し、フェ・イ・アレグリアが教育プログラムなどの教育サービスを提供するという点で合意している。

フェ・イ・アレグリアが提供している教育には、①正規教育、②入学対象年齢を過ぎた子どものための無就学教育、③ハンディキャップを持つ子どものための特別教育、④キリスト教徒の価値の教育、⑤手に職をつけるための職業訓練校がある。職業訓練校は、オルタナティブ教育としてのものと、大学と同様のカリキュラムを持つ学校の二種類で構成されている。また、新教育法に対応できるよう、教員の研修のための、ケチュア語、社会科学、数学教授法、校内暴力予防戦略など11のコースを持った研究・研修センターも運営している。これは、フェ・イ・アレグリア学校の教員だけでなく、ボリビア全土の教員にも開放しており、ボリビア全体の教員と教育の質の向上を図っている。

一般にボリビアでは私立学校のほうが、公立学校より教育の質が高い。公立学校は、教員の度重なるストライキなどで学習の質や学ぶ権利が保証されていないとすら言われている。一般家庭においても質の高い教育を子どもたちに受けさせたいというニーズは当然あるが、私立学校は授業料の支払いをしなければならないのに対し、公立学校の授業料は無料で、さらに教科書が貸与されることを考えると、現実問題として、多くの家庭で公立学校を選択せざるを得ない状況にある。このように、子どもが質の高い教育を受けられるか否かは家庭の経済状況に委ねられてきた。そのなかで、フェ・イ・アレグリアは質の高い教育を廉価で提供している。しかしながら、「貧しい人びとを優先」で経済的・社会的理由から教育の機会がない子どもたちに貧困を乗り越えるための教育を支援することから始まったフェ・イ・

アレグリアであるが、都市部では状況が変わってきている。

「公立学校」、「私立学校」、「政府と協定を結んでNGOが教育サービスを提供する学校」と選択肢の多い都市部では、入学試験が実施されるほどに、フェ・イ・アレグリア学校の人気が年々高くなっている。世界銀行の報告書は、フェ・イ・アレグリアの人気の要因を「①私立学校と比べても遜色のない教育の質である、②統一テストの結果は他の学校と同じか少し上である、③生徒とだけでなく保護者とも家族であるという意識がある、④個人個人に合わせたプログラムを作ることが可能である、⑤多くのネットワークを持っている、⑥私立学校は富裕層の多い特権階級に目を向けているのに対し、学校を核とした地域や保護者のコミュニティーを大事にしている」と分析している。

正規教育の授業料については、公立学校は無料であるが、私立学校はひと月あたり70\$から150\$、フェ・イ・アレグリア学校では120Bs(約17\$)である。教員の給料は、給料体系が公立学校、私立学校、フェ・イ・アレグリア学校とそれぞれ違い、比較しにくいが一番わかり易い校長の給料を比較すると、公立学校は4000Bs(約571\$)、私立学校は5000Bs(約714\$)、フェ・イ・アレグリア学校は公立学校長より15%多い4600Bs(約657\$)となっている。公立学校分の4000Bsはボリビア政府から支払われるが、差額の600Bsはイエズス会から補填されている。

『Memoria(Bolivia)』によると、2012年のフェ・イ・アレグリアの高校までの学校数は431校、生徒数は171,595人となり、ボリビアの学校の約20%を占めている。

2010年公布の新教育法は、高校までを義務教育、公立学校は大学までを無償とし、二言語教育を現実化したことが大きな特徴となっている。フェ・イ・アレグリアの正規教育部の学校は他の「公立学校」、「私立学校」と足並みをそろえ、新教育法に迅速に対応している。

ここでは、ボリビア第二の都市サンタ・クルスにあるフェ・イ・アレグリアの職業訓練部に属する寄宿制女子職業学校を扱う。この寄宿制女子職業学校は、イエズス会修道女のマザー・カンディダ・マリア・デ・ヘスス(Madre Cándida María de Jesús)が創立した、イエズス孝女会イハス・デ・ヘスス(Hijas de Jesús)によって、1978年6月25日にサンタ・クルスのサン・ヘルマンに設置された。サン・ヘルマンはボリビア第二の都市であるサンタ・クルスから170kmほど北西に位置した農村である。この女子職業学校はフェ・イ・アレグリアに所属し、修道女4人がフェ・イ・アレグリアとともにこの学校を管理、運営している。ここに入学する生徒は、前教育法の義務教育修了者であるが、この職業学校は高校としては認可されていないので、修了しても新教育法での義務教育修了にはならない。この問題について、フェ・イ・アレグリアはどのように考え、対応していくのか。そこから、フェ・イ・アレグリアの人間開発に対する考え方が見えてくると考え、この寄宿制職業学校に滞在し調査した。

2012年3月現在、1年生18名、2年生18名の、15歳から23歳までの36名が共同で暮らしている。以前は50名を超えることもあったが、新教育法改正で生徒数は、急激に減少した。

ほとんどの保護者の家は農村部にあったが、学費・寮費を毎月120Bs(約17\$)支払っており、それほど貧困の家庭ではない。生徒36名のうち5名はシングルマザーであり、15名は両親の不仲、再婚で自分の家庭に居場所を見つけれなかった生徒、3名は片親しかいない生徒、その他、家事労働に縛られたり、虐待されたり、見捨てられていた生徒であった。

この学校は、いわゆる手に職をつけることで生活向上を計り、社会的、経済的自立を実現させることが目的なのはもちろんであるが、それだけでなく、手に技術を持つことで自分に自信を持ち、豊かな人生を送るための支援にも重きを置いている。

義務教育が高校までとなったため、希望者は徒歩5分ほど離れたフェ・イ・アレグリア学校の夜間部へ通うこともできる。夜間部へ一週間に三日通学すると、四年間で高校の卒業証書が授与される。夜間部の授業料はひと月10Bs(約1.5\$)である。現在、この職業学校からは6名の生徒が通っており、18:30からの授業に間にあうよう、食事の後片付け免除など便宜を図っている。彼女らは夜間高校卒業後、大学か看護学校進学を考えている。

3月の嵐で、宿舍や校舎の修繕が必要になった時には、保護者が5名ほど駆けつけた。また、成長しすぎた庭木の枝の剪定も保護者に依頼している。このようにフェ・イ・アレグリアは保護者が積極的に学校に関与することによって、自分の子供が行っている学校への関心を持ち、理解を深めることになり、それが生徒の学習に対するモチベーションに繋がり、その結果として留年・退学の減少になるのではないかと考えている。

授業には、美容・情報・刺繍・洋裁・数学がある。美容は美容師を目指して髪の設定やメイクを学習し、情報では、コンピューター操作を学び、自分がデザインした刺繍の図柄をコンピューターミシンで刺繍する技術を習得する。洋裁は、基礎からパーティードレス完成まで学ぶ。また、洋裁の基礎的なこと（直線縫い・ボタン付けなど）は地域住民向けのオープン講座も開いていて、多くの女性が参加している。

生徒の日常生活は、「規則正しい生活を心がけ、健康に気づかい、いつも清潔を保つ」とことと「神や周りに感謝する」ことを基本にしている。平日は朝八時半から二限の授業があり、昼休み二時間を挟んで、夕方六時半までさらに二限の授業がある。日々の掃除や食事も自分たちで行う。土曜日は、翌週ための買い出しや、パン作り、平日にできない庭掃除や、村の中央広場の掃除をする。日曜日は、午前中はミサで、午後は自由時間である。

在校生徒にアンケートを取ったところ、美容室で働きたい生徒が約40%（36人中14人）、洋裁関係に進みたい生徒が45%（同16人）、その他、看護師、秘書、歌手などである。しかしながら、卒業後に、学校で学んだことを生かして就職できる生徒はわずかで、ほとんどは自宅で、家の手伝いの傍ら、結婚式や祭りの髪の設定やメイク、服の製作や修繕の仕事をしている。とはいえ、入学前と比べると、人の役に立っているという自信を持って生活していると校長は話している。

フェ・イ・アレグリアは教育援助専門のNGOとして貧困と取り組んでいるが、職業学校で生活するうちに、国際連合（UN）、世界銀行やユニセフなどの支援機関とフェ・イ・アレグリアは「貧困」に対し、全く同じ認識で活動しているとは言い難いと思われることがあった。その対象は貧困層とすること、社会的に排除されている人々の存在を認識していること、人の持つ能力や才能が十分に引き出されていないと考えていること、などは共有事項ではある。しかしながら、人間開発に関するボリビアのフェ・イ・アレグリアは、コミュニティーの役割や協力をもっと重要視し、それらを活用しながら進めたい、としている。これは過去に経験した教化村や、先住民による先住民の教育であった「ワリサタ」から、共同体を単位とするボリビア人らしいシステムを取り入れようとしていると言える。さらに、フェ・イ・アレグリアの活動初期は、神父が校長や教師も兼ねていたことから、農村部などのコミュニティーの信頼度は政府や警察より高い。これらを鑑みると開発支援機関は、フェ・イ・アレグリアなどの宗教系NGOともっと連携をとって協働したほうが良い面もあるのではないだろうか考える。

また、国連開発計画（UNDP）は、貧困とは、医療、教育などの社会サービスを受けられないといった社会的・政治的な側面もあるとし、「健康で長生きすること」「知的欲求が満たされること」「一定水準の生活に必要な経済手段が確保できること」の三つの側面から人間開発の達成度を示す総合指数、人間開発指数（HDI）を『人間開発報告書』で、毎年公表している。また、2010年版からは、HDIを補完することを目的として、不平等調整済み人間開発指数（IHDI）、ジェンダー不平等指数（GII）および多次元貧困指数（MPI）が新たに導入されている。このように、開発概念は国内総生産（GDP）などの経済中心の指標から、人間中心の指標に変化しつつある。

しかし、フェ・イ・アレグリアでの生活水準を表す貧困の解釈は、その他にも達成感、満足感、安心感、希望、尊厳など、人間としてのクオリティーの欠如も含めた捉え方をしている。これは、日本の外務省が刊行している『開発教育・国際理解教育ハンドブック』に記載されているように、「伝道師による奉仕活動としての医療や教育が、人間開発の原型であると考えられる」ならば、修道会から生まれたフェ・イ・アレグリアの根底に、上記のような貧困のとらえ方があっても不思議はない。数値では測る



ことのできない心の豊かさにも目を向けなければ、真の貧困撲滅は完結しないであろう。

今回の事例にあげた職業学校は、家庭内において自分の居場所のない女子を受け入れ、彼女たちが裁縫や美容の技術を身につけることで、「親あるいは人の役に立ちたい」願いが実現でき、それが自分に自信を持つことにつながるという貢献の実績が見られるが、他方、高校として認可されていないという現実にも直面している。この問題の解決策の一つとして、近隣にある夜間部のフェ・イ・アレグリア高校に行く選択肢を設け、入学するための学力向上を図る数学の授業も用意している。

また、職業学校は卒業したが、夜間高校はまだ修了していない生徒のうち、家が遠くにあつて、高校への通学が困難の場合には、高校卒業まで職業学校に住み込みで授業サポーターや教会バザーの作品製作のアルバイトができるシステムも採用しサポートをしている。

しかしながら、初等教育時に十分に学校に通えず、基礎学力が不足していることが、高校入学の大きな壁となり、実際に夜間高校へ通っている生徒は二割以下である。年齢と学力に幅のある生徒が学んでいる職業学校で、基礎学力を身につけるためクラス単位で同じ授業を進めるのは非常に困難である。レベル別に分けた授業が望ましいが、先生不足の問題もあり、実現は難しい。そこで、去年新設したコンピューター室で個々に取り組むソフトを利用する試みも始まっている。

ボリビアが貧困から脱却するには問題が山積しているが、あわせて、心の豊かさという人間本来の幸福も求められている。

#### 【参考文献】

- 伊藤滋子（2001）『幻の帝国－南米イエズス会士の夢と挫折』同成社
- 馬橋憲男・高柳彰夫（2007）『グローバル問題とNGO市民社会』明石書店
- 江原裕美（2001）『エクアドルの先住民二言語教育と女性』国立女性教育会館研究紀要 第5号
- 江原裕美（2001）『開発と教育－国際協力と子供たちの未来－』新評論
- 江原裕美（2003）『内発的発展と教育－人間主体の社会変革とNGOの地平－』新評論
- 大貫良夫ほか監修（1999）『ラテンアメリカを知る事典』平凡社
- 岡村美由規（2007）『ボリビアにおける教育政策形成の政治的構造－教育改革法策定過程の歴史的分析から－』国際開発研究フォーラム第35号、名古屋大学
- 岡村美由規（2008）『多様性を越えた統合へ－ボリビアの教育改革・異文化間二言語教育の例－』国際教育協力論集 第11巻第2号、広島大学
- 岡村美由規（2009）『教育改革に反対する教員組合運動の一考察－ボリビア農村部教員組合初期指導者のライフヒストリー分析を通じて－』国際教育協力論集、第12巻第2号、広島大学
- 岡村美由規（2011）『職権と現実との間で苦悩する学校委員会－ボリビア・親の学校参加がもたらす帰結の一考察－』国際教育協力論集 第14巻第1号、広島大学
- 黒田一雄、横関祐美子（2005）『国際教育開発論－理論と実践－』有斐閣
- 高柳彰夫（2011）『めざすは貧困なき世界－政府と市民の国際開発協力の－』フェリス女学院大学
- 武田和久（2004）『インディアス政策とイエズス会士の対応』キリスト教史学58、キリスト教史学会
- 中川文雄・松下洋・遅野井茂雄（1985）『ラテンアメリカ現代史Ⅱ』山川出版社
- 日本カトリック司教協議会・社会司教協議会（2012）『なぜ教会は社会問題にかかわるかQ&A』カトリック中央協議会
- 原毅彦（2002）「帰帰するレドゥクシオン」杉本良男編『福音と文明化の人類学的研究国立民族学博物館調査報告
- 舟木律子（2008）『ボリビアの地方分権改革－サンチェス・デ・ロサダ政権における「大衆参加法」の狙い－』ラテンアメリカ論集42
- 眞鍋周三（2006）『ボリビアを知るための68章』明石書店

- 皆川卓三 (1975) 「ラテンアメリカ教育史」、梅根悟監修 『世界教育史大系19』 講談社
- 皆川卓三 (1976) 「ラテンアメリカ教育史」、梅根悟監修 『世界教育史大系20』 講談社
- 山田経三 (1986) 「解放の神学 国際シンポジウムから」 『ソフィア』 35 (1)、上智大学季刊誌
- 国際協力機構 (2004) 『課題別指針 ノンフォーマル教育』
- 国際協力機構 (2009) 『課題別指針 貧困削減』
- 日本国外務省 (2011) 『開発教育・国際理解教育ハンドブック』
- Entreculturas(2002)*Entreculturas—Fe y Alegría, Documento de Identidad*, Entreculturas
- Fe y Alegría(2013)*Memoria 2012*, Federación Internacional Fe y Alegría
- Fe y Alegría(2013)*Memoria (Bolivia) 2012*, Federación Internacional Fe y Alegría
- Fe y Alegría (1999) *de la chispa al incendio*, Fe y Alegría
- Ministerio de Educación(2011)*currículo base de la educación de éersonas, jóvenes y Adultas*, Ministerio de Educación
- 教皇ヨハネ・パウロ二世 (2012) 回勅『真の開発とは一人間不在の開発から人間尊重の発展へ』 山田経三訳、カトリック中央協議会
- バルール・ジャック (1998) 『イエズス会の大学ないし高等教育機関が掲げるミッション・ステートメントもしくはその類似文書の分析』、上智大学教育学論集
- G・グティエレス (1985) 『解放の神学』 関望・山田経三訳、岩波現代選書
- ハーバード・S・クライン (2011) 『ボリビアの歴史』 星野靖子訳、創土社
- イエズス会教育使徒職国際委員会編 (1988) 『イエズス会の教育の特徴』 高祖敏明訳、中央出版社
- ホセ・デ・アコスタ (1992) 「世界布教をめざして」 青木康征訳、『アンソロジー新世界の挑戦11』 岩波書店
- ホセ・デ・ベラ (1987) 「映画『ミッション』に描かれたイエズス会士—キリスト教的楽園と忍び寄る悪—」 『ソフィア』 36、上智大学季刊誌
- パウロ・フレイレ (1979) 『被抑圧者の教育学』 小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳、亜紀書房
- フィリップ・レクリヴァン (1996) 『イエズス会—世界宣教の旅』 垂水洋子訳、図書印刷
- ウイリアム・V・バンガード (2004) 『イエズス会の歴史』 上智大学中世思想研究所
- Juan Carlos Parra Osorio, Quentin Wodon(2010)*Escuelas Religiosas en América Latina*, Banco Mundial
- Manuel E. Contreras: Maria Luisa Talavera Simoni(2003)*The Bolivian Education Reform 1992-2002 : Case Studies in Large-Scale Education Reform*, The World Bank
- Uwe Gellert(2011)*La hora de los hornos Sistematización sociocrítica de la Escuela Ayllu de Warisata [1931-1940]*, Free University of Berlin
- Yerko Camacho, Rodrigo Vargas (発行年不明)*Gestión Participativa en Fe y Alegría*, Fe y Alegría
- Yvette Mejía Vera(2004)*Sistematización de Warisata Escuela-Ayllu 1931-1940*, Universidad Indígena Yupac Katari

【参考ホームページ】

- 日本国外務省<http://www.mofa.go.jp/>最終閲覧2014.01.07
- ボリビア教育省<http://www.minedu.gob.bo/>最終閲覧2014.01.07
- 国連開発計画 (UNDP)<http://www.undp.or.jp/>最終閲覧2014.01.07
- カトリック中央協議会<http://www.cbcj.catholic.jp/>最終閲覧2014.01.07
- エントレクルトゥラス<http://www.entreculturas.org/>最終閲覧2014.01.07
- フェ・イ・アレグリア<http://www.feyalegria.org/>最終閲覧2014.01.07

上智大学<http://www.sophia.ac.jp/>最終閲覧2014.01.07

エリザベト音楽大学<http://www.eum.ac.jp/>最終閲覧2014.01.07

新聞「El Deber」<http://www.eldeber.com.bo/>最終閲覧2014.01.07

新聞「Los Tiempos」<http://www.lostiempos.com/>最終閲覧2014.01.07

新聞「El Periódico」<http://www.elperiodico.com/es/>最終閲覧2014.01.07



**グローバル** — 第 13 号 —

2014年 発行

発行者 大野 英二郎

発行所 横浜市泉区緑園 4-5-3  
フェリス女学院大学大学院  
国際交流研究科  
電話 045-812-8283